

チョーサー、ベン・ジョンソン、シェイクスピア にみる中世錬金術と「変容」*

濱 田 あやの

中世ヨーロッパでは、錬金術は卑金属を金に変える秘術として広く知られており、修道院や貴族の館などで実験が頻繁になされていた。民間では、この秘術を獲得するために多額の金を使って散財したり、そのような人々を騙そうとする詐欺事件がしばしば発生していた。イギリス文学においても、ジョン・ガワー(?1330-1408)の『恋する男の告解』やラングランド(?1330-1400)の『農夫ピアズの夢』などの作品にも錬金術に関する言及が見られる。チョーサー(?1340-1400)は、『カンタベリ物語』の「錬金術師の徒弟の話」(The Canon's Yeoman's Tale)で、錬金術そのものを具体的に取り上げている。

中世の錬金術は、エリザベス朝においても、人々の関心を集め、文学作品にも取り上げられている。ベン・ジョンソン(1572-1637)は、偽錬金術師が一攫千金を望む依頼人から実験費用を騙し取ることをテーマにした『錬金術師』を書き、シェイクスピア(1564-1616)も『ジョン王』(3幕1場)や『ジュリアス・シーザー』(1幕3場)、「ソネット33番」などのなかで錬金術や錬金術師に言及している。『テンペスト』では錬金術のメタファーがプロスペローをはじめとする登場人物の精神的変容に用いられている。

錬金術を、あるものを全く別のものに変える技と言い換えると、文学作品の中で錬金術を取り上げる効果は、「変化・変容」に関連しているといえよう。本研究では、作品の中で錬金術を扱っていること、登場人物の変化・変容という点から、次の3作品を取り上げる。まず、中世の錬金術をチョーサーの「錬金術師の徒弟の話」を通して考察する。次に、ベン・ジョンソンの『錬金術師』では、エリザベス朝における錬金術に対する否定的な捉え方をみる。最後に、錬金術のメタファーがシェイクスピアの『テンペスト』の中で、登場人物の心の変容にどのように使われているかを明らかにする。これ

らの作品を通して、中世の錬金術が各作品においていかに扱われていたかを明らかにしたい。さらに、『テンペスト』における錬金術の扱いかたのように、中世の錬金術を肯定的に捉えるようになった背景を考えてみたい。

1. 「錬金術師の徒弟の話」の錬金術

チョーサーの「錬金術師の徒弟の話」に登場する僧侶(Canon)は錬金術師でもある。僧侶に仕える徒弟(Yeoman)は主人の行なう錬金術の非現実性を暴き、また錬金術師を装って悪を働く別の僧侶の性質や特徴、実験の様子などを語って、その僧侶の真の姿を暴露する。

チョーサーの「錬金術師の徒弟の話」は、序章と物語の二部構成になっているが、R.クックが指摘するように、その内容に従うと四つの部分に分けることができる¹⁾。第一の部分(554-719行)は僧侶と徒弟が巡礼者の一行に加わり、徒弟が主人の僧侶と自分の行ってきたことについて話をはじめようという部分である。第二の部分(720-971行)は、僧侶が行なう錬金術の実験の手伝いをする徒弟の体験談が語られる。第三の部分(972-1387行)は、錬金術師を装い、錬金術の秘密を伝授すると偽り、ロンドンのある僧から金を騙し取る、別の僧侶の話である。最後の第四の部分(1388-1481行)は、錬金術を追究することへの警告と錬金術の書物からの引用による道徳的な教示が語られる。全体の話の語り手は、徒弟である。

徒弟は、7年間主人の僧侶が行なう錬金術の実験を手伝ってきた。その結果、錬金術が成功することは決してないと悟る。

私たちの願いは永遠に完成されません

For evere we lakken oure conclusioun.²⁾

(672)

さらに、それを行なう者に散財させることも付け加える。

だが、この学問は私たちより遙か彼方にあるので、
どれほど頑張っても追いつけないのです。

それはとても素早く擦り抜けてしまうのです。

そしてしまいには私たちを一文無しにしてしまうのです。

But that science is so fer us biforn,
We mowen nat, although we hadden it sworn,
It overtake, it slit away so faste.

It wole us maken beggers atte laste. (680-83)

錬金術を「学問」(science)と述べていることから、当時は、錬金術が学問の一種としてみなされていたことが窺がえる。「遙か彼方」(fer)という語から、人間の手を越えた遙か先にあるものであり、人間の手中には納まらないものであることが暗示されている。「素早く擦り抜けてしまう」(slit away so faste)という表現からも、錬金術の非現実性が読み取れる。またこの表現は、第三の部分(972-1387行)に登場する偽錬金術師の僧侶の神出鬼没さを語る件と重ね合わせてみると、錬金術の虚偽性を強調していることになる。そして、この術を追究するものは、最後には「一文無し」(beggars)となり、錬金術の追究がいかに無益であり、さらにいかに人を散財させ破滅へと導くかを語っている。このような錬金術に対する見解は、この話全体を通して頻繁に繰り返されている。例えば、「私たちの実験は無駄に終わるのです」(777行)、「全てが無駄なのです」(843行)など、その無益さが強調されている。

錬金術とそれを行なう者に対する悪影響を語ったあと、徒弟は、どのようにして実際の実験が行なわれるかについて自分の体験談を話し始める。

昼夜問わず、ランプは火をともしています

私たちの目的を成し遂げるために。

Oure lampes brennyng bothe nyght and day,
To brynge aboute oure purpos, if we may. (802-3)

「昼夜問わず」(bothe nyght and day)「火をともし」(brennyng)、錬金術師は熱狂的に実験を行なった。この様子は、序章で、馬を走らせ息を切ら

せ大汗をかきながら、巡礼者の一行の追い付いた僧侶と徒弟の様子と重なる。それは、彼らの錬金術への熱狂ぶりや金銀をつくりだす(multiply)という物質への執着心の強さを物語っている。

彼の駄馬は、連銭葦毛でしたが、

とても汗をかいていて、見て驚くほどでした。

彼がその馬を3マイルも一気に走らせたように思われました。

彼の徒弟が乗った馬も

とても汗をかいていて、もう歩けそうにないほどでした。

His hakeney, that was al pomely grys,

So swatte that it wonder was to see;

It semed as he had priked miles three.

The hors eek that his yeman rood upon

So swatte that unnethe myghte it gon. (559-63)

「汗をかいて」という語から、錬金術の実験室で注意深く火に息を吹きかけている徒弟の姿や、さまざまな化学薬品を調合する僧侶の必死な姿が想像できる。いくら実験を重ねても、錬金術は成功することはなく、努力はすべて無駄に終わってしまう。錬金術師が失敗する様子は、具体的に生き生きと描かれている。

これらの金属はとても激しく飛び散るのです。

Thise metals been of so greet violence. (908)

壁に突きささったり

地面に突っ込むものもいます。

They percen so, and thurgh the wal they goon.

And somme of hem synken into the ground. (911-12)

屋根へ飛び込むものもいるのです。

Somme lepe into the roof. (915)

「とても激しく飛び散る」(so greet violence)、「突きささる」(percen)、「突っ込む」(synken)、「飛び込む」(lepe)といった一連の表現は、まるでフラスコの中にある実験材料が活着しているかのように、材料が破裂する様子を示している。ここには、当時一般的に考えられていた物活論(hylozoism)が認められる³⁾。物活論とは、物質はそれ自体生命を持つものであるという考え方である。この思想によれば、卑金属にはそれ自体の中に金と銀の種子があり、ある温度と条件を与えられればその種子が成長し、金を作り出すことができる。これは中世錬金術の根本を支える思想である⁴⁾。しかし、この思想が現実のものとなることはなく、僧侶や徒弟たちの努力は徒勞に終わる。この僧侶や徒弟の性質や特質の描写から、貧しい身なりや硫黄の匂いといった、中世の錬金術師の典型的な姿が読み取れる。

徒弟が巡礼者の一行に加わりたいという僧侶の意思を伝えると、宿の主人は徒弟に尋ねる。

なぜあなたのご主人は、そんな粗末な身なりをしているのかね。

Why is thy lord so sluttissh, I the preye. (636)

徒弟が僧侶の賢さや徳について称賛するのだが、僧侶の身なりがあまりに貧しいので、宿の主人は不思議に感じてこう質問するのだ。この間に答えて、徒弟は僧侶が錬金術師であり、自分は彼の手伝いをしていたことを明らかにする。財産全てを実験費用に注ぎ込んでしまうため、錬金術師の身なりは「粗末」(sluttissh)にならざるを得なかった。また、硫黄は実験に不可欠であったから、彼らはずっと硫黄の匂いを放っていた。

人々は硫黄の匂いで彼らであるとわかるのです。

Men may hem knowe by smel of brymstoon. (885)

「硫黄」(brymstoon)は地獄を想起させる⁵⁾。硫黄の匂いのする実験室は、硫黄の煙の立ち籠めた地獄と重ねられている。このイメージは、地獄ともい

える実験室から出てくる錬金術師は悪魔であり、第三の部分に登場する偽錬金術師が悪魔のような人物として語られることにつながっていく⁶⁾。実験室で行なわれていることは忌まわしいことであり、徒弟は錬金術を「呪われた技術」(This cursed craft: 830行)と呼んでいる。

悪魔の術の手伝いをした徒弟は身体に影響を受けている。

なぜあなたはそんなに顔色が悪いのかね。

Why artow so discoloured of thy face? (664)

私の顔色も生き生きとし赤みがあったのに
いまでは青白くて鉛色です。

And wher my colour was bothe fressh and reed,
Now is it wan and of a leden hewe. (727-28)

宿の主人が徒弟の顔色の悪さについて尋ねている。「顔色が悪い」(discoloured)とは、顔色だけでなく、不安な精神的状態を暗示している⁷⁾。また、「生き生きとし赤みがあった」(fressh and reed)という表現が、若さと希望に満ちた精神状態を示すとすれば、「青白くて鉛色」(wan, leden)は、若さが失われ、希望をなくした精神を表現しているといえよう⁸⁾。徒弟の顔色の悪さは、身体面だけでなく精神面の衰弱も暗示している。

フラスコをかける火の温度を調整するために息を吹き掛けるのは、徒弟の仕事であった。長時間火を眺め、またきつい匂いのする薬品をフラスコの中に入れるため、徒弟の目は爛れてしまっている。

私の仕事のせいで、目はかすんでしまいました。

And of my swynk yet blered is myn ye. (730)

「目はかすんでしまった」(blered)とは、目の爛れを意味するが、それによって視力が制限されていることがわかる。同時に精神的な視力の衰え、つまり、錬金術に夢中になりすぎて、その無益な本質を見抜けない心の盲目性を示し

ている⁹⁾。執拗に実験を繰り返す僧侶と、実験の手伝いをして心の目を失ってしまった徒弟の特徴は、チョーサー学者C.マスカティンが指摘したように、錬金術の持つ「盲目的な物質主義」を明らかにしている¹⁰⁾。

実験の努力が無駄に終わるだけでなく、そのために財産もなくし、さらには物質欲にかられ、人を精神的にも堕落させる錬金術は、まさに悪魔の術とみなされている¹¹⁾。それゆえに、このような錬金術は、徒弟が呼ぶように、「呪われた技術」であり、キリスト教会側も同じ見解を持っていた。

第三の部分では、ロンドンのある僧を騙した偽錬金術師の僧侶による詐欺の手口が徒弟によって語られる。第一部分・二部分では錬金術の愚かさが明らかにされたが、ここでは錬金術が悪魔の術として提示される¹²⁾。錬金術師を装ったこの僧侶は、まさに悪魔とみなされている。

私たちの中に、ある僧侶がいます

町を悪で汚染してしまうような。

Ther is a chanoun of religioun

Amonges us, wolde infecte al a toun. (972-73)

この世界に、彼ほどの悪人はいないでしょう。

In al this world of falshede nis his peer. (979)

この悪党め

この嘘つき僧侶め、悪魔が彼を捕らえるがいい！

this feendly wrecche,

This false chanoun — the foul feend hym fecche! — (1158-59)

錬金術師を装った僧侶は世界を「汚染する」(infecte)悪の根源である。僧侶が、これから偽の錬金術で金を騙しとろうとしているのは、聖職に就く者(priest)である。つまり、悪がキリスト教世界に侵入しようとしており、悪をなす僧侶は悪魔ということになる。僧侶の行為がいかに忌わしいものであるか、徒弟によって何度も繰り返され、強調される。

偽錬金術師の僧侶は、実験をロンドンのある僧の前で三度行なう。すなわ

ち、偽錬金術師は、この僧を三度騙すのである。「三度」という数は、繰り返しの強調を意図しているだけでなく、そこにはキリストが荒野で修行中に悪魔から三度挑戦を受けるといった逸話に因む、キリスト教的な意味が込められていると思われる。イギリスの中世道徳劇には、悪魔による三度の誘惑に打ち勝つキリストの話を取ったものがある¹³⁾。悪魔に誘惑されたキリストは、貪欲・虚栄心・権力欲という三つの悪を克服する。この道徳劇からみると、悪魔と呼ばれている偽錬金術師に三度騙される僧は、この三つの悪に負けてしまったとみなすことができよう。

三という数はまた、「錬金術師の徒弟の話」のすぐ前に語られる、聖女シシリアの逸話を扱った「第二の尼僧の話」を想起させる。聖女シシリアは異教徒をキリスト教徒へと改宗させ、弾圧にあっても信仰を貫いて殉教した人物である。

「第二の尼僧の話」の中で、シシリアは異教徒の改宗を三度行なう。一度目は夫であるヴァレリアンを、二度目は彼の弟ティビュルス、そして三度目は、ヴァレリアンとティビュルスを捕えたローマの役人マクシムスとその部下たちをキリスト教徒へと改宗させる。

「改宗」とは、AがBに変わるという意味で、「変容」と言い換えることができよう。この点で、「錬金術師の徒弟の話」と「第二の尼僧の話」は変容という同じ主題を扱っているといえる¹⁴⁾。前者は、卑金属を金に変容させる錬金術を扱いながら欲望による人間の墮落という変容を暴いている。後者は、聖女によって異教徒がキリスト教徒へ変容するという信仰心に基づく、神の力による変容を描いている。

偽錬金術師の僧侶が三度騙すことを語る件は、聴く者に聖女シシリアによる三度の改宗を思い出させるだろう。また、「三」という数は、キリスト教の三位一体を想起させる¹⁵⁾。偽錬金術師の三度の実験は、三という数が想起させる宗教的な意味と、この話の前にある「第二の尼僧の話」への回想を誘う。錬金術による墮落した人間への変容が、改宗という神による変容のすぐ後に置かれたことにより、錬金術追究がいかにかに悪しきことか、人間をいかにかに物欲に駆りたて墮落させるか、ということが強調される。ここに、二つの話

を前後に並べたチョーサーの意図があると考えられる。

徒弟を通して、中世の錬金術は人を欲に駆り立て、墮落させる悪魔の術として、またキリスト教の神を侮辱する忌わしい術として語られている¹⁶⁾。このことは、徒弟とその主人である僧侶が巡礼者の一行に後から加わるという冒頭において、二人がキリスト教世界の外からの来訪者として登場する場面からすでに示唆されている¹⁷⁾。

人を墮落へと誘惑する悪魔の術である錬金術が、第一の部分から第二の部分での錬金術の非現実性と散財の危険性の話と、第三の部分の偽錬金術師の僧侶の話の双方において語られた。ここにみられる錬金術は、いずれも卑金属から金銀を作り出すことを目指し、人を物欲へと駆り立てるものであった。この点から、これらの錬金術は偽錬金術(false craft)としてみなされていたことがわかる。

偽錬金術師の僧侶による詐欺の話を終えた後、全体の話のエピローグとして第四の部分で、徒弟は真の錬金術について語る。R.クックの解釈のように、第一の部分から第三の部分で語られた、徒弟自身の体験や偽錬金術師の僧侶が犯した詐欺事件の話をして錬金術を批判したのとは異なり、最後の部分で、徒弟は、正当な錬金術の理論を述べることによって人間がむやみにその術を追求することに対して警告している¹⁸⁾。これまでの徒弟の話ぶりは一変して、錬金術の書物から引用しながら、非常に厳粛に道徳的な教示を述べる。

誰もこの術を探そうと一生懸命にならないことです。

理解できなければ

学者の意図や言葉を。

Lat no man bisye hym this art for to seche,

But if that he th'entencioun and speche

Of philosophres understonde kan.

(1442-44)

当時、錬金術師たちの間でよく知られていたといわれる、フランスの医師で

あり、錬金術師でもあったといわれている、アーノルド・ヴィラノーバ (Arnoldus de Villa Nova, c.1235-1314) による『哲学者の薔薇園』 (*Rosarium Pilosophorum*)からの引用である¹⁹⁾。誰も「この術」 (*this art*)、つまり錬金術を熱心に追究してはならない、と徒弟は忠告しているが、学者たちの「意図や言葉」 (*th'entencioun and speche*)を理解できなければ、という条件を付けている。すなわち、第一の部分から第三の部分で明らかにしたように、物欲や詐欺のために錬金術を行なおうとしても、決して成功しないのである。このような錬金術は、偽錬金術であり、真の錬金術ではないからだ。徒弟は、その理由を次のように語る。

キリスト様にとっては、とても大事で貴重なものですから
それが明らかにされるのをお望みではないのです。

For unto Crist it is so lief and deere
That he wol nat that it discovered bee. (1467-68)

引用文のなかの 'it' は錬金術を示す。これは神にとって「貴重な大切なもの」 (*lief and deere*)である。それ故に、神は、神の領域に属する錬金術の秘密が明らかにされることを望んではいない。

続いて、別の書物からも引用する²⁰⁾。

学者たちはみな誓っているのです。
それを誰に対しても明かしてはならないと
また、本にも記さないことも。

The philosophres sworn were everychoon
That they sholden discovere it unto noon,
Ne in no book it write in no manere. (1464-66)

秘密を知る者は、それを決して明かさないと誓わなければならない。それを神は望んでいる。それ故、神の意思に適わない錬金術は真の錬金術とは

みなされない。すなわち、真の錬金術とは、神の恩寵のもとになされるべきものなのである²¹⁾。

徒弟は、話の締め括りとして、自身の結論として、錬金術を追究することへの警告を再度発している。

そこで私はこのように結論します。天にいらっしゃる神様は
どのようにして人がこの石にたどり着くかを
学者たちが明らかにすることをお望みではないのですから、
それは放っておくのが最善の策です。

なぜって、神様の御意志に反することをしようとして
神様を敵にしてしまう人は
決して栄えることはないでしょうから、
たとえ一生賭けて増やそうとしても。

Thanne conclude I thus, sith that God of hevене
Ne wil nat that the philosophres nevene
How that a man shal come unto this stoon,
I rede, as for the beste, lete it goon.
For whoso maketh God his adversarie,
As for to werken any thyng in contrarie
Of his wil, certes, never shal he thryve,
Thogh that he multiplie terme of his lyve.

(1472-79)

‘this stoon’ は、錬金術の究極的な目的である「賢者の石」(The Philosopher’s Stone)のことである。この石を粉末や液体にして卑金属に付着させると、金に変容するといわれていた。この魔法の石を獲得する術、すなわち錬金術が明らかにされるのを神様がお望みでない以上、「それは放っておく」(lete it goon)べきだと忠告している。なぜなら、神様が望まないことをすることは神様の御意志に反することであり、それは神様を敵にすることになる。その結果、神様からの恩寵を得ることは望めず、幸福に過ごす

ことはあり得ないからだ。卑金属を金に変える術が錬金術なので、財産や富を「増やし」(multiplie)「栄える」(thryve)と解釈できるが、‘multiplie’のもつ「増殖させる」という意味が「子孫繁栄」の連想を誘う²²⁾。従って、錬金術を追究することは、財産を「増や」せないだけでなく、子孫も「殖や」せないという結末に至る、ということなのだ。錬金術を追究した報いは、現世においてだけでなく、子々孫々に至るまで神の恩寵を得られないことにある、といえよう。徒弟の警告は、敬虔なキリスト教徒にとってかなり深刻に受けとめられたであろう。

チョーサーは徒弟の話を通して、人間の行なう偽錬金術と神の行なう真の錬金術の双方を描いている²³⁾。神の錬金術とは違い、人間が物欲ゆえに追究したり、詐欺行為のために利用する錬金術を悪として、それを行なう錬金術師を悪魔とみなす。この図式は、神は世界を統治する中心的存在であり、神を汚す行為やその行為者を、悪・悪魔とみなす世界観と呼応する。従って、詐欺を犯す偽錬金術師が悪魔のイメージで語られることには、当時の人々の錬金術に対する警戒が込められている。

チョーサーは、「錬金術師の徒弟の話」で、当時の錬金術とそれにまつわる詐欺事件を題材に、錬金術を行なうことに対して警告を与えている²⁴⁾。このことは、徒弟自身がそれを繰り返すことから十分に示されている。これが、チョーサーの意図であることは、異論を挟まないであろう。しかし、チョーサーは錬金術を単に人間を墮落させる悪魔の術としてのみ見なしていたのだろうか。

錬金術の虚偽性を語ったこの話は、『カンタベリ物語』の他の話と同様に、教訓的で哲学的な締め括りで終わる。第四の部分は、それまで錬金術を痛烈に批判してきた話ぶりとは全く違い、徒弟は真面目で道徳的である。この第四の部分によって、第一の部分から第三の部分で語られた、人を欲望に駆り立て墮落させる偽の錬金術が強調されるとともに、真の錬金術は神の意志に適うものであることが示されている。そして、その神秘性をより高め、それを弁護する効果をあげている²⁵⁾。さらに、このことは、「変容」という共通のテーマを扱った、すぐ前の「第二の尼僧の話」によっても強調されて

いる。チョーサーがこの話を書いた理由は、偽錬金術に対する警告だけでなく、真の錬金術が何たるかを示すこともあったと考えられる。

2. 『錬金術師』の錬金術

錬金術を追究することへの警告と真の錬金術の擁護のために語られたチョーサーの話は14世紀後半のものだが、その後、1403年に錬金術は法律によって禁止されることになる²⁰⁾。中世の錬金術がイギリス文学作品に再び現れるのは、17世紀になってからである。

ベン・ジョンソンの『錬金術師』の初演は、1616年に出版された第一フォリオ版の扉によると、1610年である²¹⁾。サトル、フェイス、ドル・コモンの三人が集まり、ロンドンのとある一軒家を拠点に行なう詐欺行為が、痛烈な諷刺と皮肉をもって写實的に描かれている²²⁾。偽錬金術師を装うのは貧乏人のサトルである。フェイスは、時に隊長に扮して詐欺のカモを家に誘い込み、また時に偽錬金術師サトルの助手を勤める。フェイスは、実際は主人のラヴウィットの留守をあずかる召使いである。この二人と組むドル・コモンは売春婦である。彼女の協力でサトルとフェイスは、騙される人々を物欲に駆り立て、彼らの情欲をも煽り立てていく。

ジョンソンは、チョーサーと同様に、人間を物欲や情欲に駆り立て墮落させる錬金術とそれを利用した詐欺行為を非難し、警告を与えているが、さらに、錬金術を追究することを通して、人間が理性を失くして欲望のままに振る舞い動物的次元にまで墮落する様を描いている²³⁾。サトル、フェイス、ドルの三人に騙される人々の中には、社会的にも経済的にも恵まれている弁護士ダパー、煙草屋ドラガー、騎士エピキュアン・マモンなどが含まれている。彼らは、金の増殖と快樂を求めて欲に駆られていく。欲に駆られた醜い人物たちの様子は、人間が欲望に支配された動物的な次元にまで墮落してゆく様を強調している。

難解な錬金術用語を操り、巧みな言葉で人の欲に火を点ける三人の詐欺師たちの姿は、動物のイメージで描写されている。

フェイス。 あっちへ行け、この牝犬め！

Away, this brach!³⁰⁾ (I. i .111)

ドル。 あんたたち、年がら年中言い合いしている野良犬さんたち、
二匹そろって騙しに出掛けなよ。

you perpetual curs,

Fall to your couples again, and cozen kindly.

(ibid.,136 - 37)

サトルとフェイスが言い争いになり、ドルが二人をなだめようとする、フェイスが「牝犬」(brach)と言い放つ。‘brach’とは、特に牝の獵犬を意味する。ドルが仲裁に入り、サトルとフェイスを「野良犬」(curs)と呼ぶ。これは、比喩的に「下等な人間」を意味する。また、「騙す」(cozen)という語は‘brach’と重なり、この三人は獲物を捕えようとしている詐欺師であることを暗示している。人を騙して金儲けをしようというサトル、フェイス、ドルの三人は、物質主義者であり、物欲を満たそうとする動物的な人間に成り下がっている。

三人が騙す人々の中で、もっとも貪欲なのは騎士マモンである。彼が、偽錬金術師サトルのもとにやって来る。それは、マモンがかねてから依頼していた錬金術の実験によって作られる「賢者の石」(The Philosopher's Stone)を受け取る予定日であった。

マモン。

偉大な石の効果、

その石をひとかけら吹きつけると

百の水銀、銅、銀が

それと同量の金に変わるのだ

いや、その千倍にもなる、そして無限に増えるのだ。

th' effects of the great medicine,

Of which one part projected on a hundred

Of Mercury, or Venus, or the Moon,

That alchemy is a pretty kind of game,
Somewhat like tricks o' the cards, to cheat a man
With charming. (II.iii.180-81)

「仕掛け」(charming)という語から錬金術の魔術的な側面と、それによって人を魅惑する力が想起される。「いかさま」(tricks)、「騙す」(cheat)と共に、「遊び」(game)という語から、それほど努力をせずに快樂と富を手に入れることができるものとして考えられていることがわかる。サーリの台詞に、ジョンソンの『錬金術師』で描かれている錬金術の何たるかが端的に表現されている。

卑金属を金に変えるという錬金術の根本は、変化・変容・変質の経過を辿るということである。ジョンソンの描く錬金術は、人を欲望の虜にしてしまうものである。人間が悪徳を行なう者へと変身する様は、まず、偽錬金術師サトルが召使いのフェイスを隊長に格上げしてやることで示されている。

サトル. 箒と塵とじょうろの身分からお前を引き上げ、
お前を昇華し、精錬し、凝固してやっつろ
恩寵という至福の世界の中でな？
Raised thee from brooms, and dust, and watering-pots,
Sublimed thee, and exalted thee, and fixed thee
In the third region, called our state of grace?
(I.i.67-69)

‘Sublimed’, ‘exalted’, ‘fixed’ は錬金術用語であり、「昇華・精錬・凝固」を意味する。ここでは、サトルがフェイス(thee)を素材として錬金術を行なったことが語られている。その結果、召使いのフェイスが隊長に成り上がったのだが、外見は地位が「上がって」も、それは見掛けにすぎず、精神的な面では詐欺行為と欲望を追究した結果、墮落した人間になり果てる。このことを考え合わせると、「引き上げる」(Raised)という言葉は、かなり皮肉な響

きをおびてくる。

ベン・ジョンソンは、人間を墮落させる錬金術を通して、サトル、フェイス、ドルの三人の詐欺行為と彼らに騙される人々の愚かさと、欲望を駆り立てられ、動物のような低次元の人間に変わりはてた様を描いている。同時に、また、そのような錬金術を揶揄し、それを追究することに対して警告を与えているといえるだろう。

3. 『テンペスト』の錬金術

ジョンソンの『錬金術師』が初演された翌年の1611年、シェイクスピアは『テンペスト』を創作している³¹⁾。この作品では、精神的調和のとれたより高い次元の人間への変容が錬金術のメタファーを通して描かれている³²⁾。

チョーサーの「錬金術師の徒弟の話」やジョンソンの『錬金術師』は、錬金術そのものを題材に取り上げているが、『テンペスト』では、錬金術そのものへの言及はみられない。しかし、錬金術との関連を暗示する語句やイメージが多く用いられており、劇の進行と登場人物たちの精神的な変化・変容が、錬金術の実験過程のメタファーを下敷きとして描かれている。

中世以来、錬金術は卑金属を金に変えるための物質的な技であったが、錬金術のメタファーは、人間の内面に作用し、その中に潜む不純なものを浄化し、金のように内面的に調和の取れた最高の人間に変えるという精神的な作用にも用いられた。チョーサーやベン・ジョンソンはそれぞれ錬金術の物質的な側面に焦点をあて、人間の墮落という錬金術の悪影響について描いているが、シェイクスピアは、『テンペスト』で、中世の錬金術の用語や錬金術を彷彿させる語句をメタファーとして用いて、人間の抱える問題を克服し、より高い次元に到達する人間の精神のあり様を描いている。

『テンペスト』における変化・変容は、主人公プロスペローの大公復位・アロンゾーとの和解に表されている。プロスペローが冒頭で嵐を起こす目的はそのためである。そして、これらの目的を達成するためには、アロンゾーやその息子ファーディナンド、さらにプロスペロー自身の内面が変化しなければならない。登場人物たちの変化が、錬金術やその実験過程を想起させる

イメージを通して描かれている。

例えば、冒頭の嵐の場面は錬金術の実験過程の第一段階を示唆している³⁰⁾。錬金術の実験は、実験材料を構成している各要素に分離し溶解して、その中にある不浄な部分をあぶりだし腐敗させ、浄化した後、その構成要素をしっかりと固定し新しい物質に再生させる、という過程をたどる。³¹⁾

この第一段階の「分離・溶解」を示すメタファーとして、中世錬金術の関連文献では、「海の嵐」が用いられている。この段階は、実験に用いる物質内の秩序を崩壊し混乱状態になることを意味する。

私たちの船はガラスで作られているけれども
嵐を乗り越えなければならない。

No although our ship be made out of Glasse.

But all tempest of the Aire we must abide.³²⁾

(32-33 in The second chapter of "The Breviary of Philosophy")

「ガラスで作られた」(be made out of Glasse)という語句により、この「船」(ship)は錬金術の実験に用いられるフラスコに相当するとみなすことができる。ここでの実験材料は、フラスコであるガラスの船の中にいる乗組員である。

このような実験の第一段階を「海の嵐」として表現していたことを考慮すると、この劇のタイトルでもある「嵐」は、錬金過程の始まりとして考えられる。人間の心を変える錬金術を行なう魔術師プロスペローは³³⁾、アロンゾーたちの乗る船を自分の統治する孤島に引き寄せるため嵐を起こす。荒波に揉まれる船の中では、ナポリ王のアロンゾーや貴族たちよりも、船乗りたちのほうが場慣れしていて、彼らを指導する立場にいる (I. i. 13-14, 16-18)。このことにより、幕開けから地上での階級の秩序が崩壊していることがわかる³⁴⁾。また、嵐によって死の危険性にさらされた乗員たちの気も狂わんばかりの様子から理性を失くした状態、すなわち精神的な秩序の混乱が窺える。

このように冒頭の嵐は、錬金術の実験に用いられる卑金属などの素材が、

その構成要素の分離され、混沌とした状態に解けることに相当し、混乱や秩序の乱れとして、錬金術の実験過程の第一段階にあることを暗示している。同時に、この劇全体がその実験過程に従って進行していくことが示唆されている。

冒頭の嵐の場面のもと、エアリエルが歌う次の一節は、これから行なわれる心の錬金術を暗示している。

エア.

海による変化は

やがて豊かで貴重なものとなるだろう。

a sea-change³⁸⁾

Into something rich and strange.

(I. i. 403-4)

海の嵐で始まった変容は、「やがて豊かで貴重なもの」(something rich and strange) に到達する。これは、プロスペローが最終的に慈悲深さをもつ人物へと変わることを示唆している。

また、プロスペローが統治する孤島も錬金術的なイメージで描かれている。孤島に漂着したアロンゾーやゴンザーロがファーディナンドを探しながら島内を歩き回るとき、島のことを「迷路」(maze: .iii.2, .i.242)と表現する。この言葉は、実験に使用されるフラスコと、その中で実験材料が対流する様子を想起させる³⁹⁾。

さらに、実験を行なう際に欠かせない触媒であるメルクリウス、すなわちマーキュリー(水銀)の役割は、その特徴を考慮すると、プロスペローの魔術の助手を勤めるエアリエルが果たしているとみなすことができる。

エア.

空を飛び

水の中を泳ぎ、火に潜り
巻き毛の雲にも乗ります。

be' t to fly,

To swim, to dive into the fire, to ride

On the curl'd clouds.

(I. ii. 190-92)

プロ、 地中に潜って私のために仕えること。

To do me business in the veins o' th' earth. (ibid.,255)

触媒の水銀は、四大元素の性質を全て備えているといわれている⁴⁰⁾。また、この水銀は、両性具有であると考えられていた⁴¹⁾。エアリエルにも同じ特質がみられる。エアリエルは、女神に姿を変えたりするが、特にその性別が言及されることはない。このことから、エアリエルの性別は男女どちらも備えたものであるといえよう。さらに、メルクリウスは鳥として言及される場合もあった⁴²⁾。エアリエルも、鳥とみなされている。これは、プロスペローがエアリエルのことを「可愛い鳥よ」(my bird:IV.i.184)、「我がエアリエル、チチチ」(My Ariel, chick:V.i.316)と呼んでいることからわかる。エアリエルがメルクリウスの特徴を持ち合わせていることを考えると、エアリエルはプロスペローが行なう錬金術の触媒であるといえる。

以上のように、嵐という状況設定、舞台となる孤島、プロスペローに仕えるエアリエルには、錬金術との関連性がみられる。

このような状況設定の中、『テンペスト』では、アロンゾー、その息子ファーディナンド、プロスペローの三人を精神的に高める心の錬金術が行なわれる。

『テンペスト』では、ファーディナンド、アロンゾー、プロスペローの3人の精神的な錬金過程が描かれるが、特に主人公であり錬金術を施す本人でもあるプロスペロー自身の変容過程と錬金術の実験過程の対応を取り上げよう。

人間の心の錬金過程は、実験材料を分離・溶解し、不浄な部分を腐敗し、浄化させ、固定させる物質の錬金過程に従って行なわれる。精神的な錬金過程の場合、第一段階の「分離・溶解」は、自分の内面を見つめることを意味する。第二段階の「腐敗」とは、自分の内面に潜む罪意識や不浄な部分を認識し、克服しなければならない精神的な課題に向かいあうことである。第三段階の「浄化」はその課題の克服を、最後の段階の「固定」は新しい自分に再生することを意味する。

ミラノ大公復位と娘ミランダの結婚というプロスペローの計画を遂行する

プロ.

私の杖を折って

地中深く埋め、
 測量船も到達したことの無い深い海底に
 私の本を沈めてしまおう。

I'll break my staff,
 Bury it certain fadoms in the earth,
 And deeper than did ever plummet sound
 I'll drown my book. (V. i .54-57)

「杖」(staff)は権力を、「本」(book)は知識を象徴している⁴⁰⁾。また、本は男性の最高権威の象徴でもある。これまでエアリエルやキャリバンを魔術と知識で押さえつけてきたが、無理強いされた服従は歪みを生じ、結局キャリバンのプロスペロー暗殺計画を生む。また、これらの権力と知識を持つことによって、自身の怒りを押さえるよりも、むしろそれらに依存して、さらに怒りを助長してしまうことにもなっていた。それ故に、プロスペローが精神的な錬金過程を完遂し、「金」になるには魔術を放棄しなければならない。

魔術の放棄を宣言し、自分を追放したアロンゾーやアントニオーに対してかけた魔法を解いたとき、プロスペローの課題の克服、すなわち「浄化」が始まる。それは、夜明けのメタファーを通して暗示され⁴⁰⁾、アロンゾーの浄化と重なっている。

プロ.

術が素早く解けてゆく

朝の光が夜に忍びよるように
 その闇を溶かしながら、戻りつつある正気が
 無知蒙昧の煙を次第に払い除けてゆく
 それが澄んだ理性を覆っていたのだ。

The charm dissolves apace;
 And as the morning steals upon the night,
 Melting the darkness, so their rising senses
 Begin to chase the ignorant fumes that mantle
 Their clearer reason. (V. i .64-68)

チャーサーは「錬金術師の徒弟の話」において、物欲や詐欺のために行なわれる悪の錬金術を批判し、このような偽の錬金術を追究することに警告を与えている。それと同時に、偽の錬金術と明確に区別して、神の恩寵による真の錬金術を擁護している。このような錬金術の見方は、神を世界の中心とし、人間は神に従属する被造物であるとする、中世の世界観に一致する。チャーサーは、人間を堕落させる錬金術の追究とそれを利用した詐欺事件を当時の時事問題として扱い、錬金術そのものを自分の作品に取り上げ批判しているといえよう。

ベン・ジョンソンも、『錬金術師』において、偽錬金術師による詐欺事件とそれに騙される人間の愚かさを通して、錬金術を揶揄している。さらに、ジョンソンは、欲望に駆り立てられ、動物的な次元に落ちていく人間の変化も描いている。しかし、ジョンソンの錬金術には、チャーサーに見られるような神の錬金術と悪魔の錬金術という区別を意識しているような点は、特に窺えない。もっとも、ジョンソンも、欲を煽る錬金術は人に悪影響を与えるものとみなしているという点で、チャーサーと一致している。

一方、シェイクスピアは、『テンペスト』において、中世錬金術のさまざまな段階を、人間の心に潜む不浄な部分を浄化し精神的に高めるという心の錬金術として用いている。シェイクスピアが、錬金術に直接言及することはなく、錬金過程を下敷きとして用い、自らの精神的な課題を克服してより高い次元に到達する人間の変容を描いている。精神的錬金術によって人間を高めようとするプロスペローは魔術師だが、神ではなく人間である。プロスペローは自らの意志によって、心の錬金術を施行する。この点において、シェイクスピアは、人間の理性や意志を尊重するルネサンス思想の影響を受けたといえよう。また、シェイクスピアが、錬金術の物質的側面ではなく精神的側面を取り上げたことは、憂鬱質（メランコリー）に対する考え方の変化が関連していると思われる。

元来、錬金術には、卑金属を金に変容させるという物質的・化学的側面と人の内面を高める精神的・魔術的側面の両方がある、と当時考えられていた。中世においても、錬金術にはこの二側面があるとされていたが、神の恩寵無く

して両方の術の成功はありえなかった。人間が行なおうとする場合は、物質的側面のみの追求に陥るため、錬金術は邪悪な術と考えられたのである。

しかし、ルネサンス期の、フィチーノやピコ⁴⁷⁾等の学識者によって、人間は自らの意志に従ってその知性を磨き上げることによって神に近付ける存在であることが認識され、広く知られるようになると、錬金術の精神的魔術的側面がより注目され、評価されるようになる⁴⁸⁾。錬金術に対するこのような見解の変化は、当時の思想界全体の変動によって生じたものと考えられる。それは、憂鬱質（メランコリー）の再評価である⁴⁹⁾。

中世時代、憂鬱質は、「冷たく湿った」陰気で狂気に陥りやすいという性質のため、人間の四気質（多血質・胆汁質・粘液質・憂鬱質）の中でも最も忌み嫌われてものである⁵⁰⁾。また、墓堀りや泥棒、金貸し、知的作業などの職業に関わる人の中には、憂鬱質を持って生まれた人間が多いと考えられた⁵¹⁾。どれも、暗く活動的でない職業である。当時の占星学によれば、憂鬱質は土星（サタン）に支配されていた⁵²⁾。時間を司り死を象徴する星に支配されている人間となれば、人々に人気がないのも納得がいく。このように忌み嫌われた憂鬱質が、ルネサンス期になると、憂鬱質の人が持つ知的な側面が特に注目され、思索的な「天才の性質」へと再評価されることになる⁵³⁾。その典型的な例がシェイクスピアのハムレットである。

アグリッパが『オカルト哲学について』の中で説いたように、人間は、知性と理性をあわせ持つことによって、高次元の精神を内に宿すことができ、神に限りなく近付くことが可能になる⁵⁴⁾。このような考え方の登場によって、人間の憂鬱質はその知的な側面により、神に最も接近することのできる気質とみなされるようになる。そこで、学識者や君主によって知識の獲得が奨励され、高次元の精神を手に入れるための手段や試みが高く評価されるようになる。その試みの中の一つが錬金術であり、このような思想の変動が、錬金術の精神的魔術的側面の再評価につながった要因の一つと考えられる。

シェイクスピアが錬金術についてどのように考えていたか、彼自身の明言はないが、『テンペスト』において、精神的な意味での錬金術を劇の進行と人物の心理的变化の下敷きにしたのは明らかである。その点で、錬金術がい

かに当時の人々にとって身近なものであり、関心のある事柄であったか想像できる。チョーサーは、人間を欲望に駆り立て、神の意志に背くような人物へと変えてしまう中世錬金術の物質的側面を強調し、人々に警告を与えるために、時事問題として取り上げた。エリザベス朝において、ジョンソンは錬金術を追究する人々の姿を通して、欲望の歯止めが利かなくなった人間の墮落ぶりを描いている。ここでも、錬金術は否定的に捉えられている。しかし、シェイクスピアは人間が精神的に成長する過程を描くために錬金術をメタファーとして積極的に用い、分離・溶解から浄化を経て再生に至るまでの人間の心の変容を描いたといえよう。

*この小論は、日本中世英語英文学会第13回全国大会(1997)の研究発表原稿に、加筆したものである。

1) Robert Cook, "The Canon's Yeoman and His Tale," *The Chaucer Review*, 22 (1987), 33.

C. マスカティンは、三部構成(第一部554-971行、第二部972-1387行、第三部1388-1481行)としている。Charles Muscatine, *Chaucer and the French Tradition: A Study in Style and Meaning* (Berkeley: University of California Press, 1966), p.214.

J.D.ノースは、二部構成(第一部554-971行、第二部972-1481行)としている。J.D. North, "Chaucer: The Canon's Yeoman's Tale" in *Alchemy Revised*, ed. Z.R.W.M. von Martels (Leiden: E.J. Brill, 1990), pp.80-88.

2) 原文は、*The Works of Geoffrey Chaucer*, ed. F.N. Robinson (2nd ed., 1957; rpt., Oxford: Oxford University Press, 1974)に基づく。日本語訳は、引用者の拙訳だが、その際、梶井迪夫訳(岩波文庫、1996年)と西脇順三郎訳(ちくま文庫、1994年)を参照した。

3) *The Canon's Yeoman's Tale*, ed. Maurice Hussey (Cambridge: Cambridge University Press, 1965; rpt., 1972), Introduction, p.19.

4) Muscatine, *op. cit.*, p.218.

- 5) Hussey, *op. cit.*, p.14.
- 6) Bruce L. Grenberg, "The Canon's Yeoman's Tale: Boethian Wisdom and the Alchemists," *The Chaucer Review*, 1 (1966), 45-46.
- 7) Hussey, note on 'discoloured.'
- 8) Hussey, note on 'colour.'
- 9) Trevor Whittock, "The Canon's Yeoman's Tale" in *A Reading of The Canterbury Tales* (Cambridge: Cambridge University Press, 1968), p.267.
- 10) Muscatine, *op. cit.*, p.217.
- 11) Muscatine, *op. cit.*, p.216.
- 12) Cook, *op. cit.*, 36.
- 13) 二十一「悪魔の誘惑・姦淫の罪に問われた女」、『—イギリス中世劇集 コーパス・クリスティ祝祭劇—』、石井美樹子訳（篠崎書林、1988年）、272-280頁。
- 14) Muscatine, *loc. cit.* Robert M. Longworth, "Privileged Knowledge: St. Cecilia and the Alchemist in the Canterbury Tales," *The Chaucer Review*, 27(1992), 87. マスカティンは明言していないが、「錬金術師の徒弟の話」が「第二の尼僧の話」に続いていることに偶然以上の関連があることを示唆している。一方、ロングスワースは両方に共通のテーマとして「変容」(Transformation)を指摘している。
- 15) George Ferguson, *Signs and Symbols in Christian Art* (New York: Oxford University Press, 1954; rpt., 1961), p.154.
- 16) North, *op. cit.*, p.85. Whittock, *op. cit.*, p.262. ウイトックは、錬金術のような俗悪な目的を追究するために人間の知性を用いることは誤っている指摘し、知性の誤用をこの話のテーマとしている。Muscatine, *op. cit.*, p.221. マスカティンは、神を欺く学問への自己満足的な信仰心として、錬金術に捧げている知性を「無知」としている。
- 17) Muscatine, *op. cit.*, pp.220-21.
- 18) Cook, *op. cit.*, 37.

- 19) Robinson, *Explanatory Notes*, note on the line 1428.
- 20) Robinson, *op. cit.*, note on the line 1450. ロビンソンの註釈によれば、徒弟が引用したのはアラビアの錬金術師Seniorによる *Senioris Zadith Tabula Chimica* という著作からである。従って、原文では「プラトン著作」とされているが、それはチョーサーの間違いであろう。
- 21) North, *op. cit.*, p.86.
- 22) Hussey, note on 'multiplie.'
- 23) Muscatine, *op. cit.*, p.215.
- 24) S.F. Damon, "Chaucer and Alchemy," *PMLA*, 39 (1924), 782. North, *op. cit.*, p.82. E.H. Duncan, "The Literatutre of Alchemy and Chaucer's Canon's Yeoman's Tale: Framework, Theme, and Characters," *Speculum*, 43(1968), 655.
- 25) Damon, *op. cit.*, 788.
- 26) Duncan, *op. cit.*, 643. Hussey, *op. cit.*, p.10.
- 27) *The Alchemist*, ed., A.B. Kernan(New Haven: Yale University Press, 1974), Appendix, p.241.
- 28) F. イェイツ、『シェイクスピア最後の夢』、藤田実訳（晶文社、1980年）、166頁。
- 29) 『錬金術師』、大場健治訳（国書刊行会、1991年）、解説 255-56頁。
- 30) 原文は *Ben Jonson's Plays and Masques*, ed., Robert M. Adams (New York: W.W. Norton and Company, 1979) に基づく。日本語訳は引用者の拙訳である。その際、大場健治訳（国書刊行会、1991年）を参照した。
- 31) *The Arden Shakespeare The Tempest*, ed., Frank Kermode (6th ed., London: Methuen and Co. Ltd., 1958; rpt., London: Routledge, 1993), Appendix E, pp.150-51.
- 32) Michael Srigley, *Images of Regeneration: A Study of Shakespeare's The Tempest and Its Cultural Background* (Uppsala: Uppsala University Press, 1985), p.21.

- 33) Peggy M. Simonds, "My charms crack not": The Alchemical Structure of *The Tempest*, *Comparative Drama*, 31(1997-98), 542.
- 34) W.シューメイカー、『ルネサンスのオカルト学』、田口清一訳（平凡社、1985年）、248-69頁。
- 35) Thomas Charnock, "The Breviary of Natural Philosophy" in *Theatrum Chemicum Britannicum*, Elias Ashmole (London, 1652; ed. Allen G. Debus, New York: Johnson Reprint Corporation, 1967), p.292.
- 36) Simonds, *op. cit.*, p.538. シモンズはプロスペローに錬金術師としての姿だけでなく、野蛮な性質を持つ者や動物を音楽によって文明化し統制するオルフェウスの姿も重ねられると指摘している。オルフェウスとしてのプロスペローについては、P.G. Simonds, "Sweet Power of Music": The Political Magic of "the Miraculous Harp" in Shakespeare's *The Tempest*, *Comparative Drama*, 29(1995), 61-90 に詳しく論じられている。
- 37) 佐々木充、第四章「エアリエルのフォークロアと錬金術」、『シェイクスピア劇の中層的隠喩構造』（多賀出版、1994年）、140頁。
- 38) 原文は *The Arden Shakespeare The Tempest*, ed., Frank Kermode (6th ed., London: Methuen and Co. Ltd., 1958; rpt., London: Routledge, 1993) に基づいている。日本語訳は引用者の拙訳である。その際、豊田実訳（岩波文庫、1991年）を参照した。
- 39) 佐々木、前掲書、142-44頁。
- 40) Srigley, *op. cit.*, p.43.
- 41) C.G. ユング、『心理学と錬金術』、池田紘一・鎌田道夫訳（人文書院、1976年）、99頁。
- 42) Srigley, *op. cit.*, p.45.
- 43) C.G. Jung, "The Psychology of the Transference" in *The Practice of Psychotherapy* (trns. R.F.C. Hull, 2nd ed., New York: Princeton University Press, 1966; rpt., 1977), p.294. ユングは、実験を成功さ

せるために、錬金術師には「粘り強さと忍耐」(tenacity and patience)が必要とされる、と述べている。

44) *OED* によれば、‘staff’には「魔術で使用する杖」という意味もある。

45) Jung, *op. cit.*, p.273.

46) Barbara Rogers-Gardner, *Jung and Shakespeare: Hamlet, Othello, and The Tempest* (Illinois: Chiron Publications, Wilmette, 1992), p.106.

47) Marsilio Ficino (1433-99) フィレンツェ生まれで、メディチ家の保護を受け、プラトンとプロティノスの著作をラテン語に翻訳した。プラトンの学説とキリスト教との結びつきを説き、新プラトン主義を唱えた。その著作『三部門よりなる生について』(*De triplici vita*)において、憂鬱質は学問に適するとして、その性質を有効に用いるように助言している。

Giovanni Pico della Mirandola (1463-94) ミランドラの領主の家に生まれ、メディチ家の保護を受けた。キリスト教とプラトン主義、アリストテレス主義、ユダヤ教カバラ主義を統合し、新プラトン主義を拡大した中心人物。著作『人間の尊厳について』(*De dignitate hominis*)において、人間は、動物や植物のように自分より低次元の存在と天使のように自分より高次元の存在との間に位置する中間的存在であり、自由意志によってどちらの存在にも近付くことが可能になると説き、ルネサンスの世界観を提示している。

48) Pico della Mirandola, “The Dignity of Man” in *Renaissance Reader*, ed., James B. Ross and Mary M. McLaughlin (New York: The Viking Press, 1953; rpt., 1960), pp.476-79.

49) Frances A. Yates, *The Occult Philosophy in the Elizabethan Age* (London: Routledge and Kegan Paul, 1979; ARK ed., rpt., 1983), p.51.

ルネサンス期における土星と憂鬱質との関連に関する研究は、クリバンスキー、ザクルス、パノフスキーらによる『土星とメランコリー — 自然哲学、宗教、芸術における研究 —』(晶文社、1991年)において詳細になされている。

- 50) Yates, *loc. cit.*
- 51) Yates, *loc. cit.*
- 52) Yates, *loc. cit.*
- 53) Yates, *op. cit.* pp.51-52.
- 54) Yates, *op. cit.* p.53.